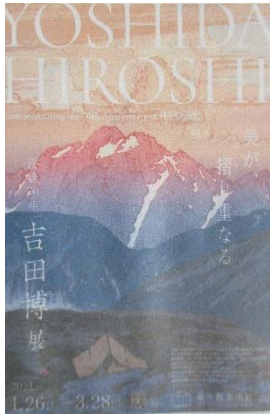


没後 70 年 吉田博展

東京都美術館(上野公園) 2021.01.26~03.28

パラミタミュージアム 04.01~05.30 静岡市美術館 06.19~08.29



「吉田博」(1876~1950)は、福岡県・久留米市出身で若き頃から洋画に取り組み、海外体験を通じて東西の芸術に触れながら独自の表現と技法を確立し、画業後期には初めて「木版画」に挑戦をして新境地を切り開いた画家である。

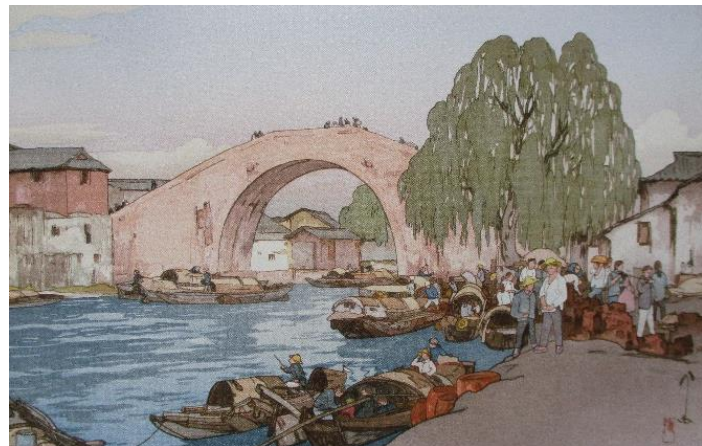
特に、深山幽谷に分け入り自ら体得した自然観と、欧米の専門家をも驚嘆させた高い技術を持って、**水の流れや光の移ろいを繊細に描き出している**ことが特筆される。

画伯の気持ちを「木版画」へと大きく舵を切らせた要因は、幕末の極めて粗悪な「浮世絵」が高値で取引されているのを見て、日本人として恥ずかしいと痛切に感じたことで、新しい「木版画」制作の必要性を痛切に感じたことであるという。

本展は、画伯の没後 70 年となった期に、初期から晩年までの「木版画」を集めるとともに、「版木」や「写生帖」を併せて展示し、西洋の写実的な表現と日本の伝統的な版画技法の統合を目指した後半生の大仕事として制作された「木版画」の全容が一挙に展示されていることが注目されている。

《日本アルプス十二題 剣山の朝》 1926年 木版/紙 上図は部分

作品名の「剣山」とは「剣岳」のことで、立山連峰の一角をなし鋭い岩峰からその名がある。最初に出したシリーズ版画集の一作で、何ともすがすがしい雄大な風景で、木版画のなかでも一、二を争う画伯の人気作品として名高い。



《瀬戸内海集 船舶(朝)》 1926年 木版/紙 《蘇州》 1940年 木版/紙

画伯の「帆船シリーズ作品」は、同じ版木を用いて摺色を変えることにより、朝、霧、夕、夜などの時間帯や大気の状態による光の変化を表現している。